

硝子工 高橋誠一

よほど特殊な用途の建物でない限り、たいいていの建設現場では硝子施工が付随する。近年では設計仕様も多様化し、大きな硝子を狭い場所にはめ込むような難しい案件も増えた。そういった硝子の取り扱いを専門にするのが、今回紹介する「硝子工」。現職に就いたきつかけ、技術の保存、若手の育成などについて、現役職長に語ってもらった。

ですけど、みんなすごい額をもらってるわけですよ。中学生の時にそれを見て、すぐにでもやってみたいなと思ってました」
父の会社に入り、あこがれだった職人の世界に飛び込んだ。しかし、抱いていたその印象はいきなり一変することになる。

厳しかった先輩たちの教え

幼いころから身近だった現場
硝子工・高橋誠一は、一九七四年、東京・南千住で硝子施工を家業とする家に生まれた。父が営む作業場には多くの職人が出入りしており、その仕事ぶりを間近に見て育った。

「親父もそうだし、働いてくれている職人さんたちがほんとにかっこよく見えて……。社長の息子だから、みんなに『セイ、セイ』ってかわいがられて、お小遣いくれたり。学校の校舎のサッシを取り換える改修工事があったら、夏休みには、よくそういう現場に連れて行ってもらいましたね。給料なんかもウチで手渡ししてたん

「今まで○○おじさんとか呼んでて優しかった先輩たちが、もう鬼に見えましたよ。『甘えてんじやねえ』『あいさつしろ』って毎日怒られてばかり。社長の息子だからって容赦はありません。むしろ、その分余計に厳しくされたかな。正直、自分にも甘えてた部分がありましたけど」
一昔前のこの業界ではありがちなことだったが、やはり新入りは最初から懇切にいねいに仕事を教えてはもらえない。

「はじめはゴミ拾いとか硝子運びとかそんなのばかりで、何か聞きに行っても頭を叩かれる(笑)。それでも先輩たちの仕事をちらちら横目で見て、十時の休憩時間や昼休みに見よう見まねでやってました。昼休みに音を立てる

KEEP

守り、伝えること

「優しく先輩たちから
厳しく叱られた毎日。
でもそれがあって、今の自分がある」



左/施工現場前にて、左から戸田建設・尾河浩明作業所長、高橋、高橋の親会社である遠藤硝子の遠藤俊代表取締役。職長会の取り組みで、職員と職人の良好な関係が築かれている。
中/職長会の様子。現場の作業員が一堂に会し、その日の流れなどを共有する。
右/明星大学日野キャンパスの増築工事現場。「朝礼の1時間前には着いて、作業する場所を見ようとしています。これも先輩から学んだこと」



現場のプロフェッショナル KEEP & CHANGE

と怒られるんですけど、それでもそうやって技を覚えるしかなかったんです」

その日の仕事が終わらず、一人現場に残って、帰りは遠くの最寄駅まで歩いたこともある。

「厳しいけど、そういうのがあったから今の

自分があるのかな、と思いますね。甘やかさずに接してくれた先輩たちには感謝しています」

「ワレモノ」を扱う仕事

一口に「硝子工」といってもさまざまだが、

高橋が主に手がけているのは硝子板を現場に搬入し、取り付けられているサッシにはめ込む、という工程。

「親会社から正確な寸法をいただいているので、加工済みの硝子を持って行って枠にはめるってのがほとんど。現場で硝子板を切断することとはかなり減りました」

工程が簡略化された一方で、硝子のカットや加工の機会が激減する現状を危惧し、高橋が加盟している東京板硝子施工組合では若手職人に硝子の切り方、折り方などを指導している。

「昔は決まった大きさの硝子を現場に持って行って、その場で測って、切って、入れて…っていうのが当たり前だったんですけど、今はそういう現場は少ないですね」

被災地に赴いて受けた衝撃

両親が宮城県出身ということもあり、震災後には被災地で復旧活動に従事した。

「六月くらいに石巻に行ったら、車のドライバーなんかの店舗で硝子の下半分が津波でやられて、つららみたくなって。人が何人も亡くなったすぐ近くでそういう撤去作業をしていたんで、あの災害を風化させちゃいけないっていう思いは強いです。自分でも、当時のことは定期的に振り返るようにしています」

仲間意識の強い現場をめざす

「高橋さんと仕事をするのはこの現場が初めてなんですけど、職長会で会うと、高い要求の中にも『少しでも現場をよくしていきたい』っていう思いの強さは伝わってきますね」

現場の戸田建設・尾河浩明作業所長も話すとおり、高橋は職長会の役員として現場のよりよい環境づくりにも尽力している。

「今は職人が個人技だけで勝負する時代じゃない。たくさんさんの業者同士が話し合い、連携・協力しあって初めて施工がうまくいくんです」

「とにかく仲間意識を強くしていこうと。みんなが仲良く仕事すれば絶対現場はよくなるし、若い人も入ってきやすくなるはず。そのためにできることから進めているところですよ」



左/現場で硝子を加工することは減ったが、その分はめ込む硝子が大型化・重量化し、人力だけで施工できるケースが少なくなった。
右/硝子工の道具と言えば、持ち運びに使う吸盤とゴム手袋。「硝子の縁は意外ほど切れやすく、素手ではもちろん、手袋の上から切れてしまうこともあります」



たかはし・せいいち◎1974(昭和49)年、東京都生まれ。硝子施工の会社を経営する父の会社に入社。27歳で社長就任。主に大規模建築現場への硝子搬入・施工に従事。平成22年より戸田建設・東京職長会に入会し、現在は東京職長会幹部役員。また、東日本大震災直後には、両親の故郷である宮城県で、割れた硝子の撤去や修理作業も行った。

CHANGE

応じ、変えること

「仲間意識の強い、みんなが来たくなくなるような現場を作っていきたい」